

日向田遺跡 II

飯田信用金庫切石支店新築に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1990年3月

飯田信用金庫
長野県飯田市教育委員会

日向田遺跡 II

飯田信用金庫切石支店新築に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1990年3月

飯田信用金庫
長野県飯田市教育委員会

序

飯田市街は過密化が著しく、新規の工場・店舗の進出は困難な状況にある。また中央自動車道開通以来、一般国道 153号をはじめ市街地での渋滞が頻発し、道路環境の整備が図られつつある。現在、一般国道 153号飯田バイパスが建設中であり、またこれと交差して市街地と伊賀良・三穂地区を結ぶ市道運動公園通りが開通している。こうした状況の下で郊外への工場・店舗の進出が相次ぎ、市街地が急速に拡大しつつある。飯田信用金庫切石支店の建設もそのひとつである。

一方、太古より人々が活動した痕跡は市内各所に濃密に刻まれており、当鼎地区においても松川に平行する数段の段丘の高所・低所に多くの遺跡が営まれている。中央自動車道建設に先立ち発掘調査以来多くの遺跡で発掘調査が行なわれており、各時代の様相が次第に明らかにされつつある。今次調査地点に隣接する部分でも市道運動公園通り建設に際して発掘調査が実施され、平安時代の集落址の一端が調査されている。

国民共有の財産とされる文化財はできるかぎり現況のまま後世に伝えていくことが望ましい。しかし、無秩序な開発を必ずしも肯首するものではないが、金融機関の支店開設に伴う経済効果や高い公共性等を考慮するとその建設もやむを得ないものといえる。それゆえ建設に先立ち発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

最後に、文化財保護の本旨に厚い御理解をいただき御協力を賜った飯田信用金庫、地権者の方々、発掘調査に従事いただいた作業員の方々に深甚なる感謝を申し述べつつ、刊行の辞といたします。

平成 2 年 3 月

飯田市教育委員会

教育長 福 島 稔

例 言

1. 本書は飯田信用金庫切石支店新築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地日向田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田信用金庫の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成元年2月7日～9日に試掘調査を実施し、本調査を平成元年4月5日～5月8日実施した。続いて平成元年度末まで整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 今次調査地点は昭和59・60年度に市道運動公園通り改良工事に先立ち実施された調査地点に隣接しており、同一道跡内に位置するため連続する遺構番号を付した。
5. 発掘調査及び整理作業においては一貫して遺跡名にHNDⅡを用いた。
6. 本報告書の記載については、記載順は住居址を優先し、時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は、馬場保之・功力 司が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行った。
8. 本書に掲載された図面類の整理・遺物実測は馬場・功力があたった。遺物の写真撮影は功力が担当した。なお同作業実施にあたり佐々木嘉和・佐合英治・吉川豊及び整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集は調査員全体で協議の上、馬場・功力が行い、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さ(単位cm)を表している。また網掛けした部分は基盤の花崗岩を表す。
11. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕は図内に実線で、刃つぶし及び鼓打痕は図外に破線で、ロー状光沢は網掛けで示した。
12. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序

例言

目次

I 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
II 遺跡の環境	3
1. 自然環境	3
2. 歴史環境	3
III 調査結果	9
1. 遺構と遺物	9
1) 竪穴住居址	9
(1) 弥生時代後期	9
① 3号住居址 ② 5号住居址	
(2) 平安時代	12
① 2号住居址 ② 4号住居址	
(3) 中世	15
① 6号住居址	
2) 囲溝址	16
① 囲溝址1	
3) 集石	16
① 集石1 ② 集石2 ③ 集石3	
4) 火葬墓	18
① 火葬墓1 ② 火葬墓2	
5) 土坑	19
① 土坑1 ② 土坑2 ③ 土坑3 ④ 土坑4 ⑤ 土坑5 ⑥ 土坑6	
⑦ 土坑7 ⑧ 土坑8 ⑨ 土坑9 ⑩ 土坑10 ⑪ 土坑11 ⑫ 土坑12	
⑬ 土坑13 ⑭ 土坑14 ⑮ 土坑15	
6) 柱穴群	23
7) 遺構外出土遺物	27

IV まとめ	29
引用文献	31

挿 図 目 次

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	4
挿図2 調査位置及び周辺地図	5
挿図3 遺構全体図	7
挿図4 3号住居址	10
挿図5 5号住居址	11
挿図6 2号住居址	12
挿図7 4号住居址カマド	14
挿図8 6号住居址・火葬墓2	15
挿図9 西溝址1	17
挿図10 集石1・2	18
挿図11 集石3	18
挿図12 土坑1～12	20
挿図13 土坑13・14	21
挿図14 柱穴平面図 (1)	22
挿図15 柱穴平面図 (2)	23
挿図16 柱穴平面図 (3)	24
挿図17 柱穴平面図 (4)	25
挿図18 柱穴平面図 (5)	26

図 版 目 次

第1図 3号住居址出土土器	34
第2図 3・5号住居址出土土器	35
第3図 5号住居址出土土器・石器	36
第4図 2号住居址出土土器	37
第5図 2号住居址出土土器	38
第6図 2号住居址出土土器・石器	39
第7図 4号住居址出土土器	40
第8図 4号住居址出土土器	41

第9图	4号住居址出土土器	42
第10图	4・6号住居址出土土器	43
第11图	土坑13・柱穴・遺構外出土土器	44
第12图	遺構外出土土器	45
第13图	遺構外出土土器	46
第14图	遺構外出土土器・石器	47
第15图	遺構外出土土器	48
第16图	2・4号住居址・土坑13・遺構外出土土器・鉄製品	49
第17图	遺構外出土鉄製品・銭貨	50

写真図版目次

図版1	遺構分布状況
図版2	3号住居址 炉・断面
図版3	5号住居址 炉・断面
図版4	2号住居址 遺物出土状態
図版5	4号住居址 カマド
図版6	6号住居址 囲溝址1
図版7	集石1・2 集石3
図版8	土坑4・5・9 土坑10
図版9	柱穴 T5P1 遺物出土状態
図版10	3・5号住居址出土土器
図版11	5・2号住居址出土土器
図版12	2号住居址出土土器・石器
図版13	4号住居址出土土器・鉄製品
図版14	6号住居址・T5P1・遺構外出土土器
図版15	遺構外出土土器・鉄製品
図版16	試掘調査作業風景
図版17	重機作業風景 作業風景

経 過

1. 調査に至るまでの経過

日向田遺跡は飯田市鼎切石地籍に所在する。

鼎地区は旧飯田市街南側に位置し、市街地の過密化・道路環境の整備に伴い、急速に諸開発が進行しつつある。殊に国道153号飯田バイパスにアクセスし、市街地と伊賀良・三穂方面とを結ぶ運動公園通りが開通して以来、沿線での店舗・住宅の建設はめざましいものがある。

こうした状況下において、昭和63年11月飯田信用金庫理事長池田正より、鼎切石3817番地1他での切石支店新築計画に伴う埋蔵文化財発掘調査協議依頼書が飯田市教育委員会に提出された。当該地は昭和59・60年度に市道運動公園通り改良工事に先立ち発掘調査が実施され、平安時代の竪穴住居址が調査された地点に隣接し、埋蔵文化財包蔵地日向田遺跡の範囲内に位置する。このため重要遺構が存在する可能性が指摘され、飯田市教育委員会では同12月12日長野県教育委員会に現地協議の依頼を提出し、12月16日関係諸機関の立ち会いのもと現地協議を実施した。この結果、当該地において試掘調査を実施し、それに基づいて改めて協議することとなった。

平成元年2月6日発掘器材等を搬入し、7～9日に試掘調査を実施した。この結果、構造改善事業の実施により多少の削平を受けているものの、土坑等の遺構及び縄文時代中期から中世にかけての多数の遺物が良好な状態で確認された。これまでの諸調査を総合した結果、当該地が平安時代の集落址の一面にあたり、本発掘調査が必要であると判断された。そこで改めて協議を行なった結果、平成元年度に本発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

関係諸機関の諸協議に基づき、平成元年4月5日本調査に着手した。まず用地南半について重機により表土を除去し、調査区を設定した。用地南西隅を起点に2m×2mのグリッドを設定し、南端から北に向かってA・B・C……列、西側から東に向かって1・2・3……列とした。南北方向は磁北に対し、45.1°東に偏する。続いて作業員を入れて遺構検出作業を行なった。その結果、弥生時代後期・平安時代・中世の竪穴住居址・囲溝址・土坑等が確認された。これらについて精査を実施し、写真撮影・測量調査を行なった。4月21日残りの北半について重機により表土を剥ぎ、引き続き土坑等の遺構を検出・精査した。これらについて写真撮影・測量調査を実施し、5月8日現地作業を終了した。

その後、引き続き飯田市考古資料館において、遺物の水洗・注記・接合・復元・実測作業ならびに現地で記録された写真・図面類の整理を行ない、平成元年度末まで報告書作成作業にあたった。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林正春
調査員 佐々木喜和 佐合英治 吉川 豊 馬場保之 功力 司
作業員 細田七郎 高橋収二郎 松下直市 高橋寛治 木下当一 木下喜代恵
福沢トシコ 正木実重子 坂下やす美 吉川正実 北村重実 松下真幸
向田一雄 福沢昌子 加藤登与子 加藤ケサコ
整理作業員 池田幸子 大蔵祥子 唐沢古千代 川上みはる 木下玲子 柳原勝子
小平不二子 田中恵子 丹羽由美 林勢紀子 橋本宣子 福沢育子
福沢幸子 牧内とし子 牧内八代 松本恭子 南井規子 宮内真理子
森 信子 吉川悦子 吉川紀美子 吉沢まっ美

(2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦 (社会教育課長)
中井洋一 (社会教育課文化係長)
小林正春 (同 上 文化係)
吉川 豊 (同 上)
馬場保之 (同 上)
土屋敏美 (同 上)
功力 司 (同 上)

II 遺跡の環境

1. 自然環境

日向田遺跡は、長野県飯田市鼎切石に所在する。飯田市は、西を木曾山脈、東を赤石山脈と伊那山脈にはさまれた伊那谷の南部、天竜川による河岸段丘が著しく発達した地域である。飯田地域では、この河岸段丘がさらに大小の支流により開析され、扇状地、河岸段丘、小盆地が複雑に入り組み、変化にとんだ地形が形成されている。鼎地区は、天竜川の支流松川の形成する氾濫原と河岸段丘、扇状地の上に広がる地域である。

日向田遺跡は、松川により形成された河岸段丘のうちの低位段丘に属する上山・切石段丘面上に位置する。遺跡の南側には、松川流域河岸段丘を低位段丘面と中・高位段丘面とに分ける比高差約25mの段丘崖があり、松川よりの北側にも比高差10m程の段丘崖があり地形が区切られる。南側の段丘崖下には、湧水線の存在が知られている。北東側へは上山・切石段丘面が松川の上流に向かって狭まりながら伸び、南東側は松川と天竜川の合流地点に向かって開けている。遺跡は標高約490mの微高地を中心に広がり、この微高地上のゆるやかな南東斜面が今回の調査地点にあたる。

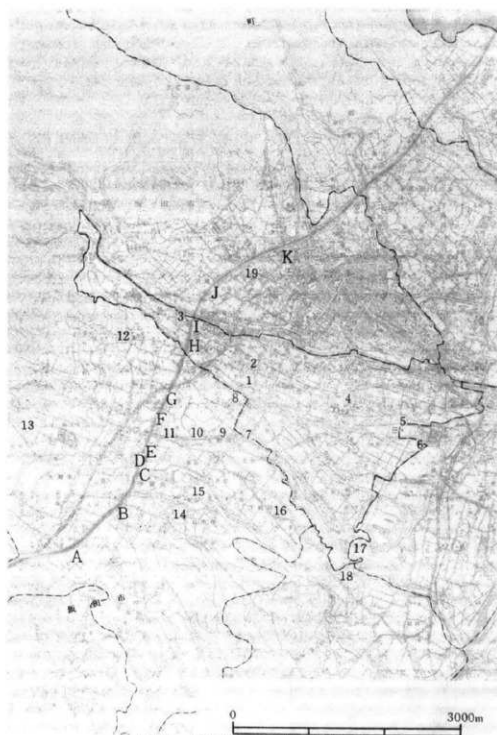
調査地区内の基本層序は、褐色土層を地盤とし、その上部に暗褐色土層、黄褐色砂質土層、耕土層が堆積している。地盤をなす褐色土層は、砂と花崗岩の巨礫を多量に含んでいることから、水成堆積による層であると考えられる。暗褐色土層は、縄文時代から中世までの遺物を含んでいる。暗褐色土層の上部に堆積する黄褐色土層は、水田が営まれていたことを示す層である。この層から出土した遺物はほとんどなく、わずかに中世の陶器（第14図2）があるのみである。この陶器も、水田造営中に暗褐色土層からまぎれこんだものとも考えられるため、黄褐色砂質土層が形成された時期は不明である。調査区北東から南東側にかけて褐色土層が急に落ち込み、薄い灰色砂質土をはさむ黒色土が厚く、水平に堆積している。

段丘崖下の湧水の存在と厚く堆積した黒色土の存在から考えると、時代により利用の仕方は異なるであろうが、日向田遺跡に住んだ人々の生産基盤を、この微高地の周辺に求めることができる。

2. 歴史環境（押図1）

日向田遺跡（1）の所在する鼎地区の中で確認された最も古い遺跡は、断片的ではあるが、天伯B遺跡（1）と猿小場遺跡（5）から先土器時代のナイフ形石器が出土している。

縄文時代早期の遺物を出土した遺跡としては、天伯A遺跡（3）のほかに、六反畑遺跡（2）があり、量としてはわずかであるが、押型文系土器群と条痕文系土器群の資料が得られている。



挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図

1. 日向田遺跡 2. 六反畑遺跡 3. 大泊A遺跡、大泊1号・2号古墳 4. 黒河内遺跡 5. 猿小場遺跡 6. 物見塚古墳 7. 田井座遺跡 8. 西の原遺跡 9. 殿原遺跡 10. 八幡面遺跡 11. 小畑外遺跡 12. 立野遺跡 13. 梅ヶ久保遺跡 14. 宮ノ先遺跡 15. 中島平遺跡 16. 下原遺跡 17. 松尾城址 18. 鈴岡城址 19. 丸山遺跡 A. 上の平東部遺跡 B. 六反田遺跡 C. 大東遺跡 D. 酒屋前遺跡 E. 滝沢井尻遺跡 F. 三志河遺跡 G. 上の金谷遺跡 H. 山岸遺跡 I. 大泊B遺跡 J. 権現堂前遺跡 K. 古塚垣外遺跡



昭和59年度
 昭和60年度
 平成元年度

挿図2 調査位置及び周辺地図

縄文時代前期の資料については確実な確認例はないが、縄文時代中期になると、低位段丘面上に立地する天伯A遺跡（3）などで大規模な集落址の一部が調査されている。

縄文時代後期、晩期の遺跡で住居址が調査された遺跡は少なく、猿小場遺跡（5）、六反畑遺跡（2）、天伯A遺跡（3）から縄文時代後期および晩期の遺物が出土している。

弥生時代後期になると集落址の調査例が急増する。後期前半には、猿小場遺跡（5）、山岸遺跡（H）で住居址が調査されている。後期後半の遺跡では、調査面積の大小、遺跡範囲内での調査区の位置など問題はあるが、調査区内に住居址が密集する大規模な集落址と、住居址が散在する集落址という2つの傾向がみられる。前者には低位段丘面の山岸遺跡（H）に代表され、後者は高位段丘面から扇状地上に多く、猿小場遺跡（5）があげられる。

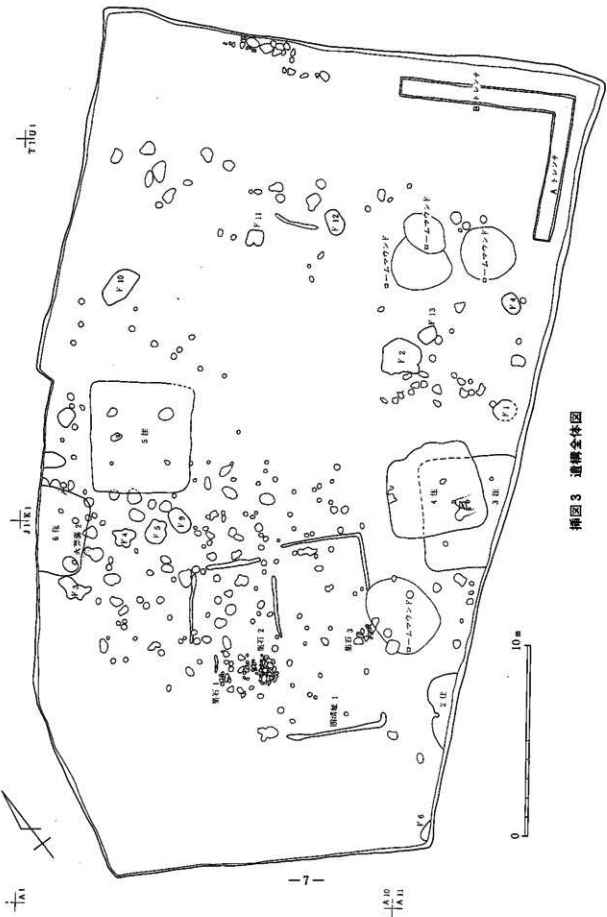
古墳時代後期になると調査事例が増加する。この時期の大規模な集落址としては、低位段丘面上の山岸遺跡（H）・天伯B遺跡（I）、六反畑遺跡（2）、黒河内遺跡（4）で集落址が調査されている。

古墳時代の遺跡としては、集落址の以外に特徴的なものとして古墳がある。鼎地区には、現在消滅したものも含め14基の古墳が知られている。詳しく調査された古墳は、後期古墳である天伯1号・2号古墳（3）があり、最近調査した古墳に物見塚古墳（6）がある。物見塚古墳については現在整理中である。

古墳時代後期をふくめ奈良・平安時代以降は隣接する伊賀良地区に、東山道の経路と「育良駅」の所在地、荘園を構成する村落の起源などの問題を考えるうえで注目すべき点があり、当鼎地区においてもそれらとの関連を考える必要がある。

平安時代の集落址は地区内全域に分布し、猿小場遺跡（5）では、25軒と多くの住居址が検出されている。一般的には遺跡単位での住居址の数は少なく、散在する分布状態をみせている。

平安時代の住居址が検出された遺跡の多くからは、中世の住居址も検出されている。猿小場遺跡（5）では、16軒の住居址が調査されている。



挿図3 遺構全体図

III 調査結果

1. 遺構と遺物

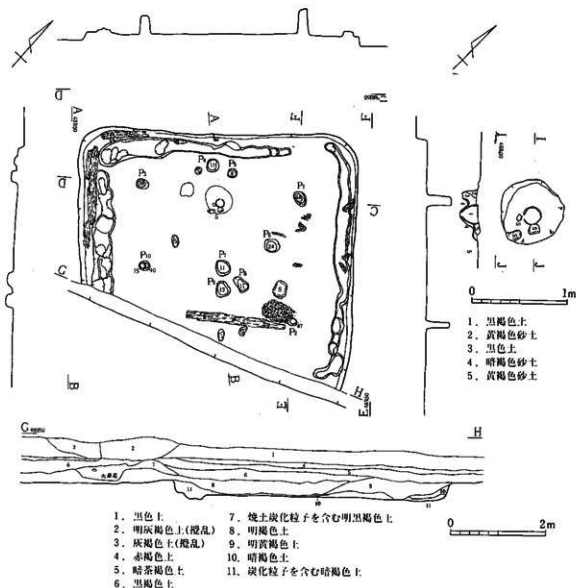
1) 竪穴住居址

(1) 弥生時代後期

① 3号住居址(押図4、第1・2図)

調査区南東側のK11グリッドを中心とする範囲、4号住居址の貼り床下部より検出され、全体の2/3程度が調査された。覆土は、明褐色土および明黄褐色土である。主軸方向はN50°Wであると推定される。平面形は隅丸方形で、北西側の壁は長さ約5.5mを測り、未調査部分を残す他の壁の長さもほぼ同様であると思われる。4号住居址に壊されていない部分での壁の高さは、27cm～39cmである。主柱穴はP1～P3の3本が確認されたが、住居址の平面形から4本の主柱穴を持つものと考えられる。主柱穴の深さは、床面から約40cm～約50cmでありほぼ一定している。3本の主柱穴はいずれも口径、底径が小さい。住居址壁際に、ほぼ全周にわたって周溝が検出されており、床面からの深さは3cm～9cmを測る。炉は住居址中央の北西壁に寄ったところに設けられており、炉縁石を持つ土器埋設炉である。埋設土器は口縁部のほとんどを欠いた甕で、底部は完全に遺存している(第2図1)。また本住居址の壁面沿いおよび住居址中央やや南寄りの床面からは炭化材と焼土が検出されていることから、火事の家屋であると考えられる。

遺物はほとんどが弥生土器で、壺と甕が出土している。壺の口縁部は、L字状に折立する(第1図1・2・5～7)。胴部の器形がわかるものは1点のみであるが(第1図3)、球形を呈している。文様は、口縁部にヘラ状工具による沈線が施され、頸部には櫛描波状文、櫛描横線文、櫛描円弧文が施される。文様の施文方向がわかるものは少ないが、第1図12は右回り、第2図4は左回りである。壺の外面に加えられる調整は、口縁部から頸部上半にはナデを施し(第1図1・2・5～7)、頸部から底部にかけてはミガキを加えるものが多い(第1図1・3・4・8・10・11)。ミガキの方向は縦方向のものが多くが斜めの方向に加えられているものもある(第1図11)。また、本住居址出土の壺のほとんどは内面が剥落している。壺のうち、炉の埋設土器として用いられていたものには、頸部に櫛描波状文が施文された後に、頸部から底部に縦方向のヘラミガキを施されている。壺の調整手法は、外面に縦方向のヘラミガキが加えられている点で共通するが、内面の調整には、ヘラミガキが加えられるもの(第2図1・2)と、ナデが加えられるもの(第2図3)があり、ヘラミガキの方向も斜めの方向(第2図1)と横方向のもの(第2図2)がみられ一定しない。



挿図4 3号住居址(断面に火葬墓1を含む)

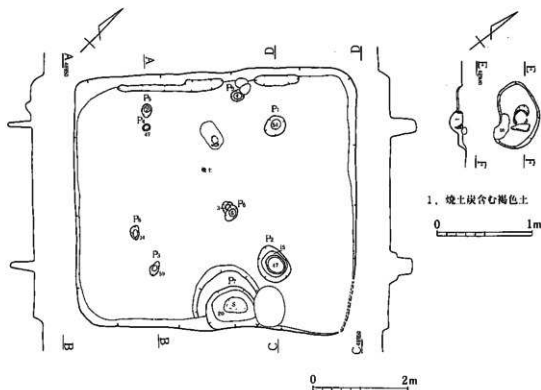
以上の出土土器の特徴からみて、本住居址は弥生時代後期中島式期に属する。

② 5号住居址(挿図5、第3図)

M4グリットを中心に検出された住居址で、全体を調査した。平面形はやや横長の隅丸長方形で、南西壁の長さ4.9m、北東壁の長さ5.6m、壁高は20cm~27cmを測る。ただし、北西壁については、上部削平のため平面形が確認できるのみで、壁高は不明である。主柱穴はP1からP4の4本が確認され、床面からの深さは約50cm~60cmと一定している。これらの主柱穴はその規模や形態の点で差が認められる。P1は口径、底径とも大きいものであるが、P3・P4は口径、底径とも小さく細長い形である。P2は二段の掘り込みを持ち、P1と同様に大きめの柱穴である。

炉は住居中央から北西壁寄りに設けられており、炉礫石を持つ土器埋設炉である。埋設土器には甕の胴部を2個体分用いている。炉の南東側床面からは焼土が検出されている。この炉の反対方向である南東壁下の中央には、周囲に低いマウンド状の盛り土をした掘り込みがあり、入り口施設である。平面形状は楕円形で、長径推定110cm、短径85cm、深さ20cmを測る。他に北東壁際に沿って、周溝の痕跡が認められた。

遺物は、弥生土器の壺・甕・高坏および挟入打製石砲丁が出土している。壺のうち、確実に口縁部・頸部で図化できるものは第3図2の櫛描波状文が施文されたもの1点のみで、胴部から底部のみ遺存したものが多く出土している。それぞれ器形および内面が剥落している点などから壺であると判断した。出土した壺にはいずれも外面には縦方向のヘラミガキが施されている。内面に加えられた調整は、器面の剥落が著しいため不明であるが、第2図7の底部から胴部にかけて縦方向のヘラミガキが、第3図2の内面には横方向のナデの痕跡が認められる。炉の埋設土器として用いられていた甕は、いずれも胴部の最もふくらんだ部分を用いており、第3図5には櫛描波状文が認められる。内外両面にヘラミガキが施されており、外面は両者とも縦方向に磨かれている。内面は第3図5が方向の一定しないヘラミガキを加えられているのに対し、第3図6は



挿図5 5号住居址

横方向のヘラミガキが加えられている。炉出土以外の甕は、口縁部がほぼ水平に折り曲げられ、最大径も口縁部にもつ器形である。文様は、櫛描波状文が施文されているもの（第3図3・7）と、文様が施されないもの（第3図4）がある。調整は口縁部と頭部の外面に横方向のナデが加えられ、胴部には、縦方向のヘラミガキ（第3図3・4）および斜め方向のナデ（第3図7）が加えられている。内面の調整も、横および斜めのヘラミガキ（第3図3・4）と斜めのナデ（第3図7）がある。高坏は脚部下半がややふくらみ、外から内側に向かって穿孔されている。孔は3単位で縦に2つの孔が並ぶものが2単位、1つの孔があげられているものが1単位で、計5つの孔が認められる。脚部外面は、縦方向のヘラミガキがなされた後にナデが加えられている。内面には浅いハケメ調整らしい痕跡がほぼ全面に観察された。土器の他、石器が1点出土している。第3図9に示した抉入打製石庖丁である。側辺部の抉りには軽い刃潰しを加えられ、刃部中央の狭い範囲に摩擦および「ロー状光沢」がみられる。石質は硬砂岩である。

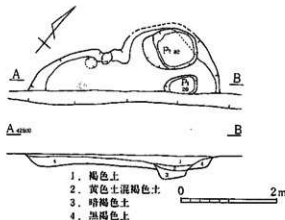
以上、主に出土土器の諸特徴から、本住居址は弥生時代後期中島式期に属する。

(功力 司)

(2) 平安時代

① 2号住居址（挿図6、第4～6・16図）

F12グリッドを中心に検出した。調査区の南側に位置し、大部分は調査範囲外にかかり未調査である。西壁及び北壁の一部を確認したのみで規模等の詳細は不明であるが、南北4.0mの隅丸方形を呈すると思われる竪穴住居址で、主軸方向はカマドからの推定でN50.0Wを示す。やや不整形なプランである。覆土は上層が褐色土であり、床面上には壁際ほど厚く黒褐色土が堆積しているのが認められた。壁高は20～25cmを測り、ゆるやかな立ち上がりを示す。西壁の一部は試掘調査の際トレンチ末端にかかり破壊した。周溝は確認できなかった。本址はローム層を掘り込んで確認されたが、カマド周辺のためか堅い部分はない。主柱穴はP1がそれと推測され、不整形円形を呈し径45×70cm、深さ20cmを測る。P2は深さ18cmを測り、両側がだらだらと掘り込まれ底面は平坦で、カマド側は特になだらかで、土師器・須恵器が横倒しに重なった状態で出土した。周溝は確認されなかった。西壁ほぼ中央に位置するカマドは、確認面から床面までが浅いため痕跡的で、その原形は不明である。火床の焼土及び高油の粘土がわずかながらあり、粘土



挿図6 2号住居址・カマド

カマドと考えられる。カマド両側及び前面に遺物が集中出土した。その多くは比較的遺存状態がよく原形をとどめていた。

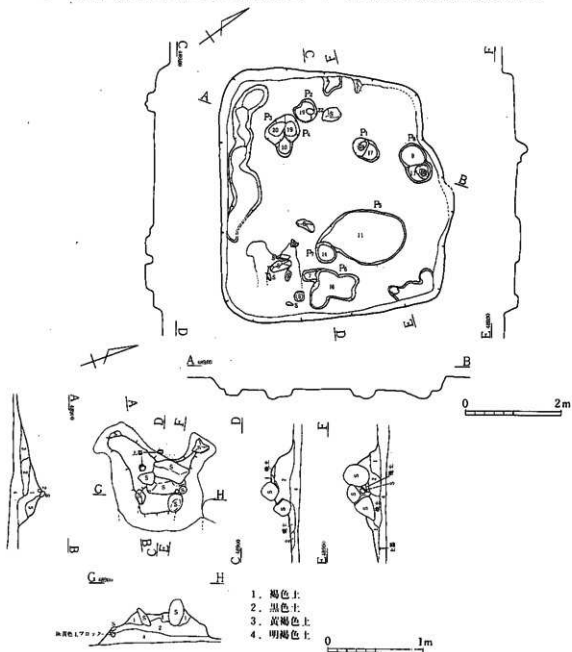
遺物は土師器甕・環・皿、須恵器蓋・環、灰釉陶器皿、磁石等があり、調査部分に比して出土量は多い。土師器甕(第4図1)は内面黒褐色、外面橙褐色を呈しており、内面上半は横位、外面縦位のカキメが施される。長胴の器形で、外面に成形の凹凸を顕著に残している。2~6は甕底部であり、いずれも長胴の器形を呈するものである。2・6は平底、3~5は上げ底で、2・4~6は木葉痕をとどめる。3は内面底部付近にヘラケズリ痕をとどめるほか、外面に炭化物が付着する。4は外面器壁が荒れるが、内外面ともロクロナデが施される。6は内面全体カキメ調整が施された後ナデにより消されている。第5図1~8はいずれも土師器甕の拓影である。1~4は長胴を呈し、1は口縁に横位のハケナデが施される。5~7は接合痕をとどめ、器面の凹凸が著しい。土師器環(第6図1)は外面の荒れが著しいが、内面は丁寧なヘラミガキが施される。2は高台脇が丁寧にナデつけられている。3・4は須恵器蓋で4は内面青灰色・外面灰白色を呈する。須恵器環(5~10)のロクロの回転方向は右回転である。5はやや軟質の環で焼け歪み大きい。外面及び底部に墨書がある。11は焼成良好で、内外面青紫色を呈するが、外面の一部に灰が被る。灰釉皿(12)はロクロケズリ後高台が付けられ、痕跡的に釉が付着している。磁石(13)は裏面側が顕著に摩滅している。

出土遺物から本址の所属時期は平安時代後期に比定される。

② 4号住居址(挿図7、第7~10・16図)

K11グリッドを中心に検出した。3号住居址と重複する。北壁中央に花崗岩の巨礫があるため、不整形であり、北辺はやや短い。本址の北側は径10~30cm程の花崗岩礫が多数混ざった黄褐色の砂質ロームの地山が広がっており、平面形はこの制約を受けていると思われる。東西5.1×南北4.6mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN56°Wを示す。埋土はほぼ黒褐色土の単一である。壁高は15~25cmを測り、全体的に緩やかな立ち上がりを示す。南壁の西側及び北東隅に深さがほぼ一定の周溝状の施設が掘り込まれているが、幅は40~60cmと揃わない。3号住居址と重複する部分を除いて、床面はきわめて硬く締まっている。主柱穴は確認できない。東壁南隅に位置するカマドは東壁際を掘り壊して確認できなかったが、石芯粘土カマドである。西側に位置する大きさ80×30×30cm程の礫二つは、抜き取り痕が確認できずまた土層断面に層の乱れもないが、その位置から袖石が燃焼部に倒れ被さったものと考えられる。その東側に残る袖石はやや扁平な円礫を外傾して据えている。左袖前方の石も形状や火を受けた痕跡などから天井石と考えられ、転落したものであろう。燃焼部は焼土が厚く発達しており、長期にわたる使用が考えられる。カマド前面及び左側にやや遺物が集中する傾向がみられた。また西壁ほぼ中央には痕跡的にはあるが、焼土及び粘土が検出されている。作り換えられる前のカマドと考えられる。P1・P8の西側から鉄製品が出土している。

遺物は土師器甕・甕・坏・皿、須恵器壺・甕・坏・皿、灰釉陶器碗・皿等があり、出土量は多い。とりわけ土師器甕が量的に多い。第7図1は口縁部及び胴部上半に最大径をもつ。内面横位・外面斜位のカキメが施され、内面頭部以下はナデにより消されている。2も細かいカキメが内外面に施されるが、内面底部際を残してナデ消されている。3は開いた器形で器面に凹凸が残される。4は内面に炭火物が付着する。7は内外面ともロクロナデが施される。甕は口縁の立ち上が



挿図7 4号住居址

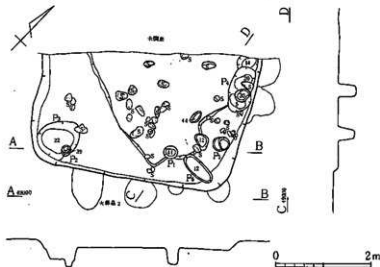
りが小さく胴部上半に最大径をもつものが多く、他に口縁に最大径をもつものが僅かながらある。ほとんどが内面頸部以下のカキメ調整をナデにより消している。第8図8の外面及び9の内面には炭化物が付着する。蓋(第9図11)は器形・調整等須恵器と共通するが、内外面とも橙褐色を呈する。土師器環はいずれも内面が黒色処理され、13は暗文が施される。14は回転糸切り後粗くヘラナデが施される。15は薄い器壁を持ち、内面ヘラミガキ・外面ナデが施される。胎土に金雲母を含んでおり、外面上半には黒斑がある。『告』ないし『吉』字が墨書される。須恵器壺(第10図1)は焼成良好な土器で内外面とも青灰色を呈する。ロクロナデ調整され、底部は回転糸切りの後ナデが施されている。7の環も同様糸切り後ナデが施されている。8は焼け歪みの大きい環で、成形も拙い。焼成不良で灰褐色を呈する。灰軸陶器(11・12)はともに灰白色を呈し、軸葉は痕跡的である。第16図3は鎌の刃先、4は刀子で基部が折り返される。

出土遺物から2号住居址と同時期の平安時代後期に比定される。

(3) 中世

① 6号住居址(挿図8、第10図)

J2グリッドを中心に検出した。調査区外にかかり、約半分は未調査である。5号住居址・土坑3に隣接し、火葬基2を切る。東西4.4mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向は推定でN36°Wを示す。覆土は褐色土であるが、開田の際に上部をほとんど削平されている。壁高は10~20cmを測り、西壁側の傾斜はやや緩やかなものの全体的に急に立ちあがる。周溝穴の掘り込みが壁際に検出され、深さは約10cmである。幅は一定せず、南西隅が広い。床面上に厚く多量の



挿図8 6号住居址・火葬基2

焼土・炭化物が分布する火災に遭った住居址である。床面の状態はほぼ平坦で、堅く焼け締まっている。多数の焼けた花崗岩が床面よりやや浮いた状態で検出された。主柱穴ははっきりしないが、形状や深さ等からP1・P2がこれにあたると思われる。P3は埋土漆黒土で急な立

ち上がりをもつ。第10図14の他、打製石斧が混入出土した。またP5西側より土鍋の比較的大きい破片が出土した。P6からは焼土が著しく多く検出された。

遺物は土師質の小型の皿（第10図13）・山茶碗（14）の他、内耳の破片等が出土している。14は見込部分に墨痕が鮮明に残っており、転用視の可能性がある。

出土遺物等から本址の所属時期は中世に比定される。

2) 囲溝址

① 囲溝址1（押図9）

H8を中心に検出された。規模南北10.3m×東西9.5mを測る不整形の囲溝址で、南北方向はN37°Eを示す。西辺の溝がやや方向を異にし、間に南北方向の2本の溝があるが、重複がなく、また南辺の溝の西端が北辺東側の溝より長いことから複数の囲溝址である可能性は低い。溝の形状・深さ・埋土等も類似する。南半は花崗岩の巨礫が黄褐色の砂質ロームに混じる部分にかかる。溝の幅は10～20cmで、壁は急な立ち上りを示し、底部は平坦でない。北東に向かって傾斜するためあっても確認面からの深さは一定しないが、おおよそ底部レベルは揃う。埋土は黒色土である。周辺に分布する柱穴のうちには本址に伴うものがある可能性がある。

出土遺物はほとんどく詳細時期は不明である。

3) 集石

① 集石1（押図10）

F・G6で検出された。集石2と接する。20～40cmの礫で、花崗岩が大半である。扁平な礫等が重なった状態で出土している。

出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

② 集石2（押図10）

G7を中心に検出され、集石1と接する。200×160cmの不整形の範囲に10～40cm程の礫が集中する。扁平な礫が多いが、大半は花崗岩である。集石1に比してレベル差が大きい。

出土遺物はなく、時期不明である。

③ 集石3（押図11）

H10で検出された。120×75cmの範囲に10～40cm程の礫が集中する。大半が花崗岩である。一部重なっているもの以外は底面のレベルがほぼ揃う。

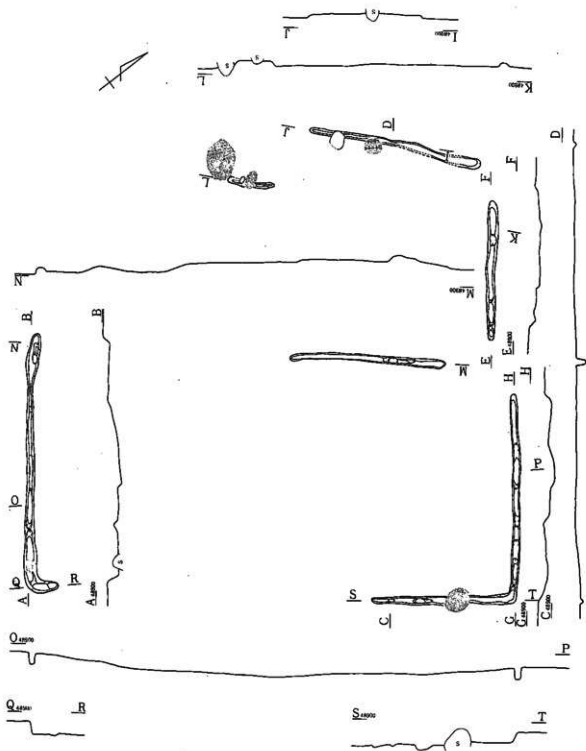
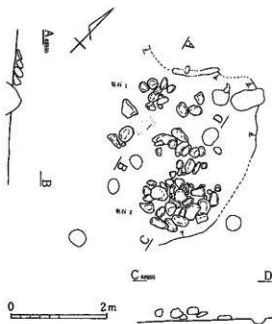
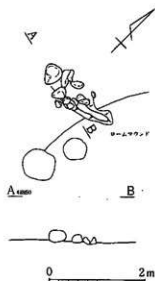


插图9 圆沟址1

0 2m



挿図10 集石 1・2



挿図11 集石 3

集石 1・2 と同様出土遺物はなく、詳細時期は不明である。

(馬場保之)

4) 火葬墓

① 火葬墓 1 (挿図 4)

3号住居址の西側のJ13グリットに検出されたが、断面で把握できたのみである。断面の観察によると、深さ21cmの掘り込みに盛り土を有する構造である。盛り土は北側に流されている。掘り込みからは、焼土が検出されている。出土遺物はない。層序からみて平安時代以降の所産であると思われるが、詳細は不明である。

② 火葬墓 2 (挿図 8)

J2グリットから検出され、6号住居址をきる。厚さ8cm~11cmの焼土が、長楕円形に堆積していた。出土遺物はない。6号住居址をきることから中世以降の所産であると思われるが、詳細は不明である。

5) 土坑

① 土坑1 (挿図12)

試掘調査の際に検出された土坑で、全体を調査したが、本調査時には全体の平面形状を把握することができなかった。確認された部分の形状から推測すると、円形もしくは楕円形をなすと思われる。深さは27cmで、礫が土坑底部から立ち上がり部分にかけて出土している。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

② 土坑2 (挿図12)

平面形状は円形で、底面は平坦である。直径約200cmで深さ25cmを測る。土坑中央南西側に浅い掘り込みがある。近現代の磁器のほか出土遺物はなく、新しい時期の攪乱であるとも考えられる。

③ 土坑3 (挿図12)

主軸をほぼ南北方向にとる。平面形状は不整楕円形をなす。底部がいくつかの面に区切られることから、複数の土坑あるいは柱穴が重複したものであるとも考えられる。長径156cm、短径71~100cm、深さは土坑中央平坦面で13cmを測る。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

④ 土坑4 (挿図12)

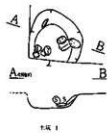
主軸をほぼ東西方向にとる。平面形状は不整楕円形の土坑であると考えられる。複数の柱穴と重複していると思われるが、覆土からは確認できなかった。最も深い掘り込みあるいは柱穴から深い順に45cm、16cm、中央の傾斜した部分で11~16cmを測る。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

⑤ 土坑5 (挿図12)

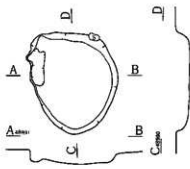
主軸をほぼ東西方向にとる。平面形状は不整長方形で、2ヶ所に浅い掘り込みがみられる。長径134cm、短径108cm、深さ約25cmを測る。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

⑥ 土坑6 (挿図12)

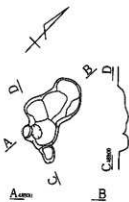
調査区外に未調査部分を残すため全体の形状は不明である。南東側に浅い掘り込みがある。深さは掘り込み部分が13cm底部7cmを測る。出土遺物としては、灰粘陶器の破片1点が出土している。時期・性格とも不明である。



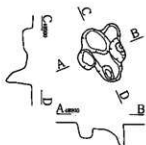
1. 坑 1



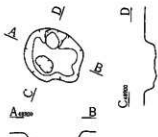
2. 坑 2



3. 坑 3



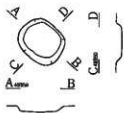
4. 坑 4



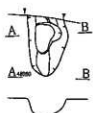
5. 坑 5



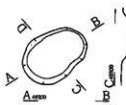
6. 坑 6



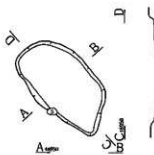
7. 坑 7



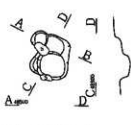
8. 坑 8



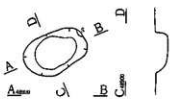
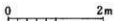
9. 坑 9



10. 坑 10

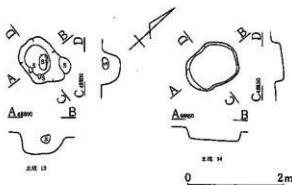


11. 坑 11



12. 坑 12

插图12 土坑 1~12



挿図13 土坑13・14

⑦ 土坑7 (挿図12)

主軸をほぼ東西方向にとる。平面形状はほぼ長方形をなし、底部は平坦である。長さ98cm、幅30cm、深さ12cmを測る。出土遺物に土師器破片1点がある。時期・性格ともに不明である。

⑧ 土坑8 (挿図12)

調査区外に未調査部分を残すため平面形状は不明である。南西側はごくゆるやかに立ち上がり底部には浅い掘り込みがみられる。深さは掘り込みが42cm、底部のうち最も深いところが34cmである。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

⑨ 土坑9 (挿図12)

主軸を南北方向にとる。平面形状は楕円形をなし、底部は平坦である。長径140cm、短径101cm、深さは約12cmである。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

⑩ 土坑10 (挿図12)

主軸は東西方向をとる。平面形状は不整長方形をなし、底部は平坦である。長さは最も長い部分で226cm、幅137cm、深さ15cmを測る。当遺跡の中では比較的大きな土坑である。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

⑪ 土坑11 (挿図12)

主軸をほぼ南北方向にとる。2つの柱穴と重複していると考えられるため、平面形状は不明であるが長方形をなすものと思われる。長さは約87cm、幅約60cmと推定され、深さは断面C Dの最も深い部分から順に、21cm、11cmを測る。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

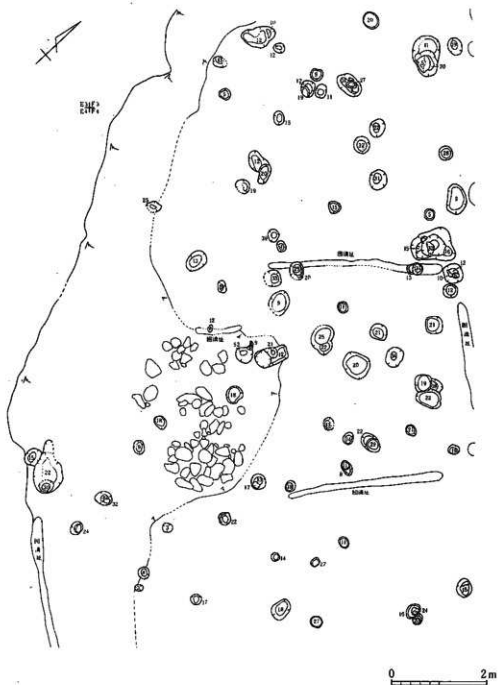
⑫ 土坑12 (挿図12)

主軸をほぼ南北方向にとる。平面形状は楕円形をなし、底部は平坦である。長径134cm、短径86cm、深さ24cmを測る。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

⑬ 土坑13 (挿図13、第11図)

主軸をほぼ東西方向にとる。平面形状は不整長方形をなし、底部は丸みを帯びている。長さは最も長い部分で107cm、幅は72cm、深さは38cmである。出土遺物は、放射状のクシ目が施された

播鉢の破片が出土しているが、本土坑の時期・性格は不明である。



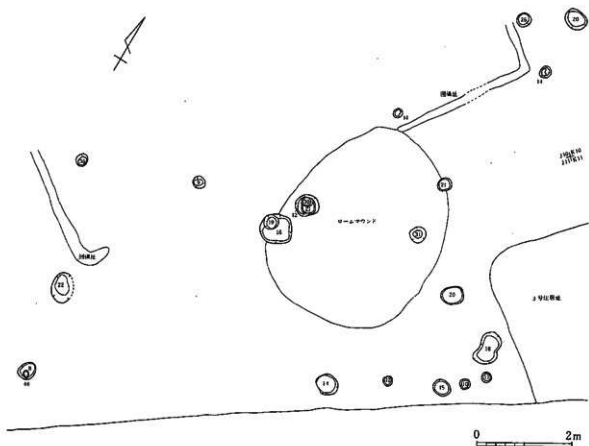
挿図14 柱穴平面図(1)

⑭ 土坑14 (挿図13)

主軸をほぼ南北方向にとる。平面形状は不整楕円形で、底部は平坦である。長径 114cm、短径約91cm、深さ24cmを測る。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。

6) 柱穴群 (挿図14～18、第11図)

調査区のほぼ全面にわたって、なんらかの建築物の柱穴と思われる穴が検出された。集中して分布するのは調査区中央北西側の範囲で、住居址が検出された範囲と一致している。これらの穴は掘立柱建物などの柱穴である可能性が高いが、形態と深さの類似する穴で、規則的に配列されたものは確認できなかった。遺物が出土した穴は、T5グリットP1のみである。平安時代末期の須恵器の坏と灰軸陶器の壺で、いずれも完形品である (第11図2・3)。壺の内部には細かな



挿図15 柱穴平面図(2)

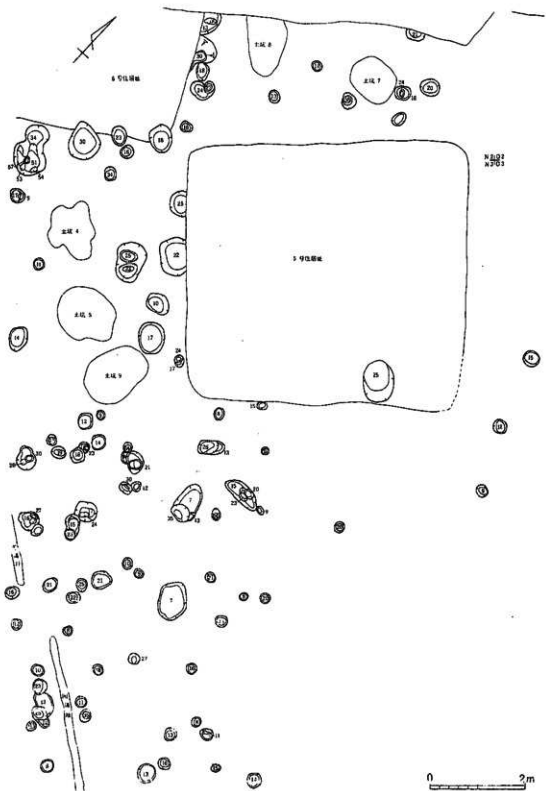


插图16 柱穴平面图(3)

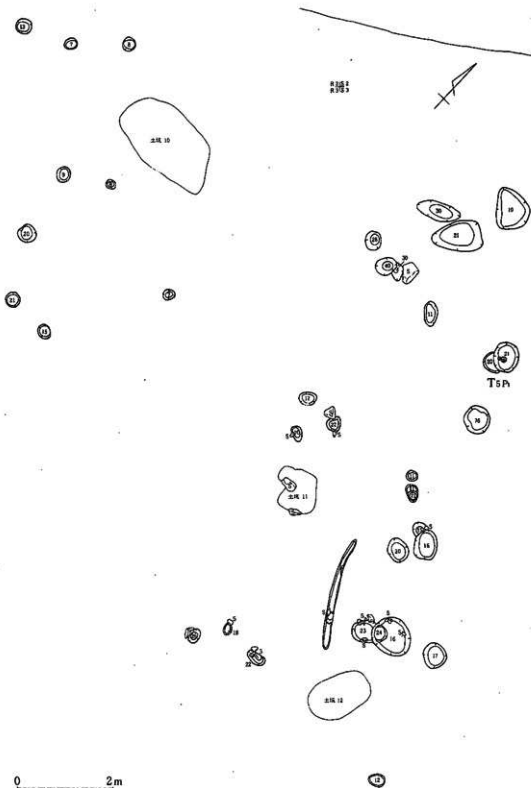
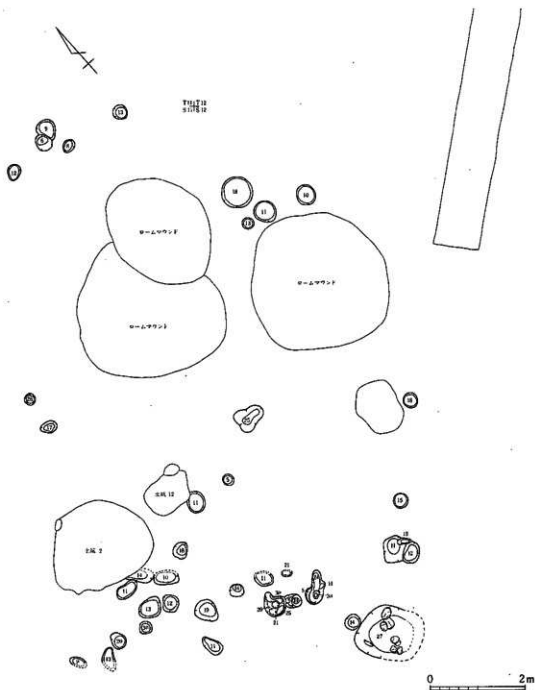


插图17 柱穴平面图(4)

炭化物が入っていたが、その材質などについては不明である。これらの遺物は、T5P1の確認面から出土したものであるが、壺と坏はT5P1の中央から直立した状態で出土しており、下部の穴も含め、ひとつの遺構であると考える。T5P1内部からの他の出土遺物はない。



挿図18 柱穴平面図(5)

7) 遺構外出土遺物 (第11図～第17図)

ほとんどが暗褐色土層からの出土遺物であり、縄文時代早期から中世までの各種の遺物が出土している。

縄文時代早期の土器としては、桶沢式土器 (第11図4)、細久保式土器 (第11図5) 条痕文系土器 (第11図6・7) が出土している。第11図6は、口縁部が内傾し屈曲する器形である。縄文を地文として幅広く浅い沈線が文様が描かれている。6・7とも内面に条痕が施され、胎土に纖維を含んでいる。

縄文時代前期の土器は、1点出土しているが型式は不明である (第11図8)。

縄文時代中期の土器としては、集合沈線文が施された中期初頭の土器 (第11図9)、櫛形文を施した中期中葉の土器 (第11図10)、および中期後葉の土器 (第11図11) が出土している。

縄文時代後期の土器は、縄文時代の遺物としては比較的多く出土している (第11図12～17)。このうち、12は後期初頭称名寺式土器に比定される深鉢、17は後期中葉の土器である。

弥生時代の遺物は、壺 (第12図1～3)・甕 (第11図4・5) が出土しているがいずれも破片である。壺には櫛波状文と櫛波四分の一円弧文が施されている。

古墳時代の遺物は少なく、図示できるものは第12図6の高環の脚部のみである。

平安時代の遺物では土師器甕 (第12図7～9)・坏 (第12図10～14)・皿 (第12図15)、須恵器甕 (第13図1～8)・蓋 (第13図9)・坏 (第13図10・11)・碗 (第13図12)、灰釉陶器皿 (第13図13) が出土している。土師器の甕 (第12図7～9) には、いずれもカキメが施されている。坏 (第12図10～14) の底部には、回転糸切りの痕跡がみられる。第12図10は墨書土器で、底部と胴部に文字が書かれている。底部の文字は「吉」という文字であるが、胴部の文字は判読できない。第12図16は、高環の脚部であるが、その属する時期は不明である。須恵器甕のうち、第13図8の内面には同心円状の叩き痕がある。第13図11の坏の底部には回転糸切り痕がみられる。

中世の土器としては、内耳鍋 (第13図14)・土師質土器皿 (第13図15)・山茶碗 (等14図1)・陶器碗 (第14図2)・天目茶碗 (第14図3)・陶器皿 (第14図4)・搦鉢 (第14図5～7) が出土している。内耳鍋 (第13図14) は、U8グリットの鎌の下から出土したものである。搦鉢 (第14図5～7) は鉄軸がかけられ、放射状のクシ目が施されたものである。5・6は口縁部、7は底部である。

石器には打製石斧 (第14図8～15)、横刃型石器 (第14図16～18)、石鏃 (第16図1)、石匙 (第15図1)、抉入打製石庖丁 (第15図2・3)、剥片石器 (第15図4～6)、礮石 (第15図7・8)、敲打痕をもつ鏃 (第15図9)、敲打器 (第15図10・11)、がある。打製石斧 (第14図8～15) のうち、8・9の刃部には摩滅が観察される。11～15は破損品で、11は基部が、12から14は刃部が欠けたものである。石質は、8・12は緑色片岩、10・14が緑泥岩、11・13が硬砂岩である。横刃型石器 (第14図16～18) のうち、17には刃部に擦痕がみられる。18は打製石庖丁である可能

性もあるが、石器の形態からはどちらとも判断できない。石質は、16が花崗岩質凝灰岩、17が緑泥岩、18が硬砂岩である。抉入打製石廂丁（第15図2・3）としたもののうち、3は有肩扇状形石器である可能性もある。剥片石器（第15図4～6）の石質は、4が緑泥岩、5が硬砂岩、6が凝灰岩である。敲打器（第15図10・11）のうち石質がわかったものは10で、輝綠凝灰岩である。

鉄器では、鉄鎌（第16図7）、刀子（第17図1）、平釘（第17図2・3）、鉄環（第17図8・9）のほか、器種不明の鉄製品（第16図8・9、第17図4～7、10・11）がある。不明鉄製品のうち、第17図4・5は釘である可能性がある。

このほか、G4グリットから宋銭が1枚出土している（第17図12）。北宋銭の治平通宝（1064～1067）であると思われるが、「治」の文字がはっきりしない。 （功力 司）

IV まとめ

今回発掘調査が実施された面積は約1,200㎡で、昭和59・60年度の調査を総合してもなお本遺跡のごく一部を調査したにすぎず、本遺跡の歴史的な位置づけ等が具体的に示され得るとは言い難い。そこで調査の結果明らかにされた諸点及び問題点の幾つかを指摘し、時代毎に概括することで本書のまとめとしたい。

縄文時代については若干の遺物が出土したのみで、明確に本時代に比定される遺構はない。遺物の面からするとその初出は縄文時代早期前葉に遡る。市内各所で該期の遺物は見つかっており、しかも明確に遺構を伴うものは少ないが、低位段丘への進出はかなり早い時期に始まっていると考えられる。以後中期前半までは遺物の量が少なく、後半以降増加する。本遺跡の中で中期の遺物が多出する地点は今時調査地点の東側及び西側に広がっており、遺構が稀薄な点等を総合すると中期集落の周縁的な状況を呈しているといえる。こうした傾向は隣接する六反畑遺跡でもやはり共通する。天伯A遺跡等の中期集落の展開と日向田・六反畑遺跡での後期以降の継続した遺物の出土は、東日本における同時期の集落の消長を考慮するとき重要な意味を持つといえる。日向田・六反畑遺跡において共通する後期以降の遺物の出土状態は、遺跡の周縁に位置する地点の廃棄等に関連したものであろうか。両遺跡で遺跡の全体に調査が及んでいない現状ではなお不明であるが、飯田下伊那で後・晩期の明確な遺構が確認されていないこと等からすると該期集落の特質に根ざしたものである可能性がある。

縄文時代晩期以降の間隙があり、続いて弥生時代後期の遺構が確認されている。3号住居址では壘に比較して壘の個体数が多く、また石器類が乏しい等の特徴がある。5号住居址は上部が構造改善事業の実施による削平を受け、確認面から床面まで壁高はわずかであり遺物量は少ないが、やはり同様の傾向がある。壘の組成比が高いことはそれに見合った高い生産性を裏付けるともいえる。北側の小規模な微高地との間の低湿な部分ないしは南側段丘崖下に散在する湧水地の利用が考えられる。しかし低湿な部分について細かくみると、漆黒土と砂層の互層状を呈しており、漆黒土の層厚は5cm程度と薄い。また近世以降において大規模な氾濫を破るなど頻りに洪水に見舞われており、こうした低湿な部分での生産活動は絶えず罹災の危機にさらされていたといえる。

本遺跡の主体を占めるのは平安時代後期の遺構・遺物である。2号住居址は約3分の1程度を調査したのみであるが、遺物量が多い。2・4号住居址とも墨書土器や鉄製農具が出土しているが、比較的小規模の堅穴住居址である。昭和60年度に調査された1号住居址では墨書土器の出土がないかわりに灰軸陶器のまとまった資料が得られている。飯田下伊那を含め長野県内出土の墨書土器は大半がこの時期のものであり、時代背景としては全国的に荘園が増加することがあげら

れよう。おそらく本遺跡の場合もこうした脈絡の中で理解することも可能であり、そうとすれば、その周辺の集落としての位置づけがなされる。とはいえ集落の一面を調査したにすぎず、今後の周辺地点の遺構等の状況が明らかにされていく中で、さらに、鼎地区全体及び隣接する伊賀良地区の該期集落等の様相が把握される段階において本遺跡の性格等が具体的に示されるといえる。

続く中世に位置づく遺構・遺物はごく一部であり、前時代から集落が何如に変容したのかは捉えようもない。文字資料の点からすると、天正7（1579）年2月の「上諏訪造宮帳前宮一御柱」に『山洞之郷東方』がみえる。『山洞之郷東方』は切石地区にあたり伊賀良庄の一部であったとされており、今次調査地点を含む一帯も同郷内と判断され、今次調査による6号住居址との間に年代差はあるものの、おそらくこれに関連する土地であると考えられる。

中世以降、本遺跡周辺は調査区北端で確認されたようになかなり大規模な氾濫に遭っているが、集落本体には及んでいない。平安時代以降集落はほぼ間断なく存続したものと考えられる。

今次調査の結果、遺構・遺物が確認されない空白期間がある。周辺地の調査が行なわれれば、あるいは時代毎に同一の微高地上で集落の中心が変化していることが明らかになるかも知れない。断片的な資料による推察ではあるが、隣接する六反畑遺跡の存続期間と総合すると集落の変遷に関して興味深い事実が浮かび上がってくる。本遺跡の場合、縄文時代晩期から弥生時代中期まで及び古墳時代から平安時代前期までの空白が認められる。反対に六反畑遺跡の場合、縄文時代晩期から弥生時代中期までと古墳時代後期の時期の遺構・遺物が確認されている。両者を併せてもなお若干の間隙があるが、縄文時代後期以前と中世以降を除くと、重複する時期はない。仮に弥生時代から平安時代の間に時代毎隣接する似通った地形の地点に集落を遷したとすると、両遺跡の基盤となる耕地の生産力には限界があったと考えられる。平安時代以降生産技術の向上等を背景として両集落が併存したと考えられる。

調査の結果、集落経営の実態、政治・社会情勢の変化に対応した集落の変容の一端が明らかにされた。しかし、調査が遺跡の全体に及んだとは言えず、今後、周辺地点・遺跡の調査が進展する中で古代から中世にかけての農村集落の全容が解明されるといえる。その保護にはさらなる配慮が必要である。

最後に、飯田信用金庫におかれては文化財保護の主旨を厚く御理解いただき、調査の実施にあたって多大なる御高配・御協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

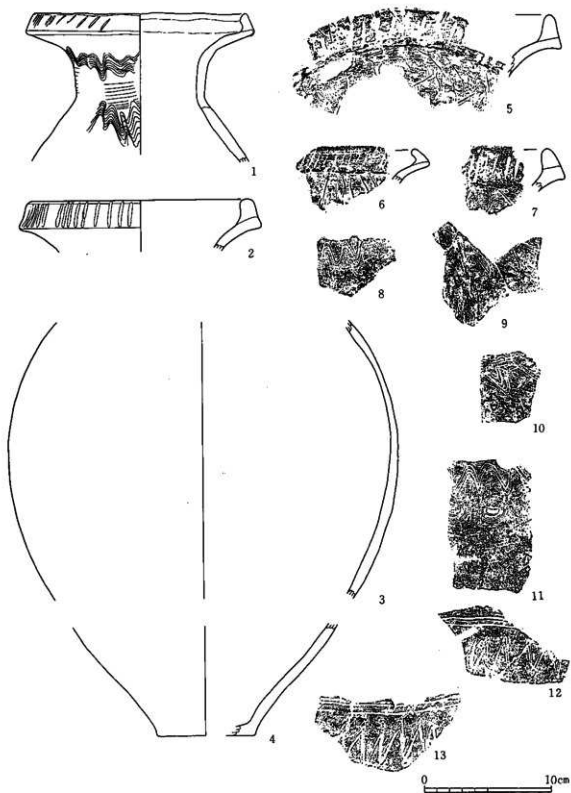
（馬場保之）

引用文献

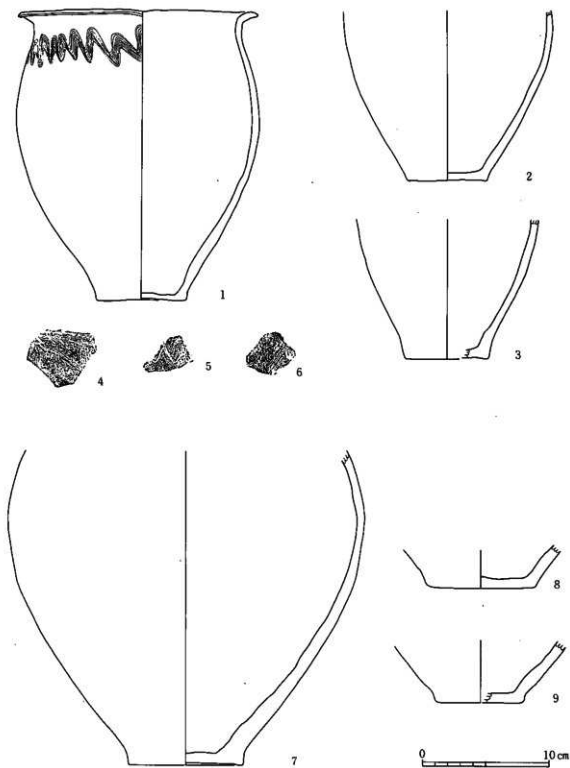
- 飯田市教育委員会 1980 『猿小場遺跡』
- 飯田市教育委員会 1985 『町道知久町中村線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1989 『六反畑遺跡』
- 鼎町史刊行委員会 1986 『鼎町史』 飯田市鼎公民館
- 中央道遺跡調査会 1973 『中央道調査報告 一飯田地区一 昭和45年度』
- 中央道遺跡調査会 1975 『中央道調査報告 一下伊那郡鼎町 その2・天伯A一』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』
- 1966 『日本の考古学 Ⅲ 弥生時代』 河出書房新社



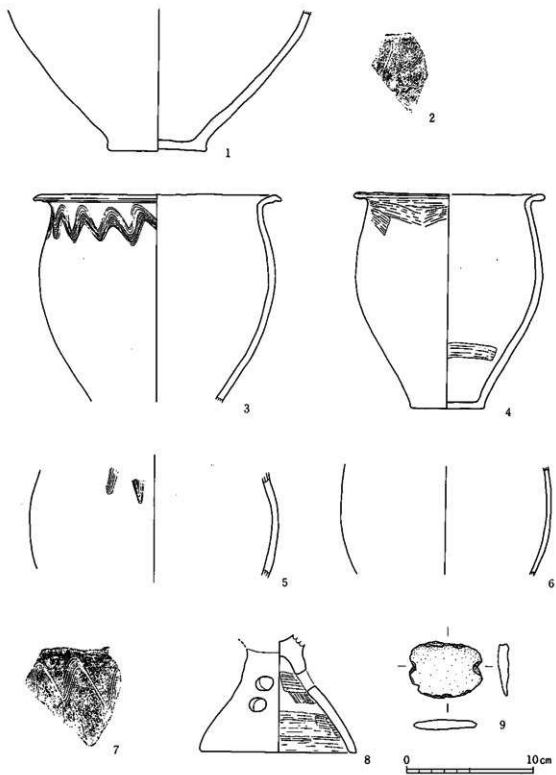
圖 版



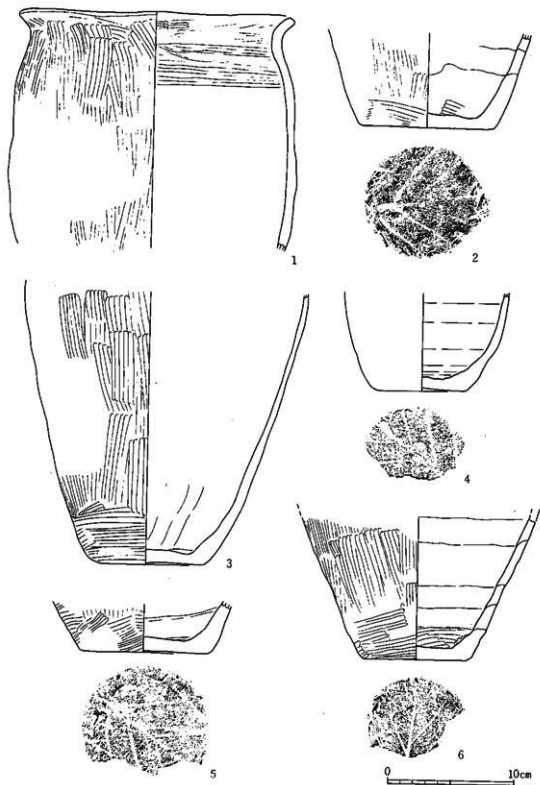
第1图 3号住居址出土土器



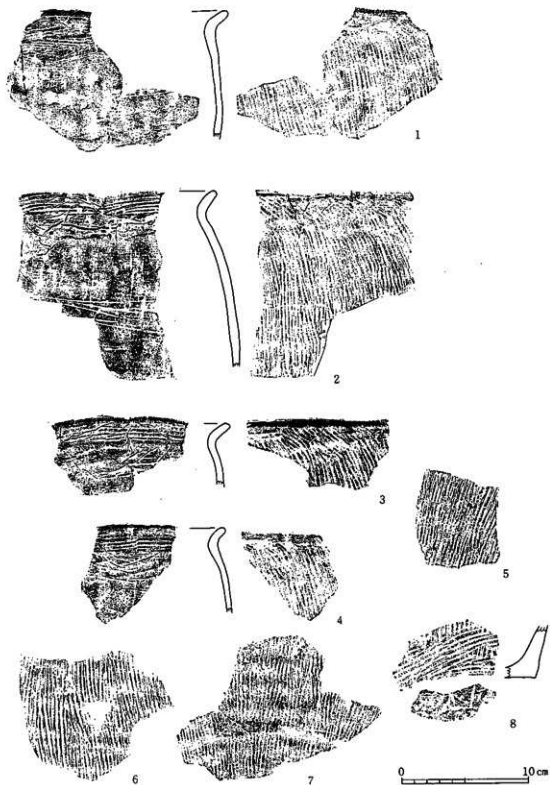
第2图 3·5号住居址出土土器(1~6 3住, 7~9 5住)



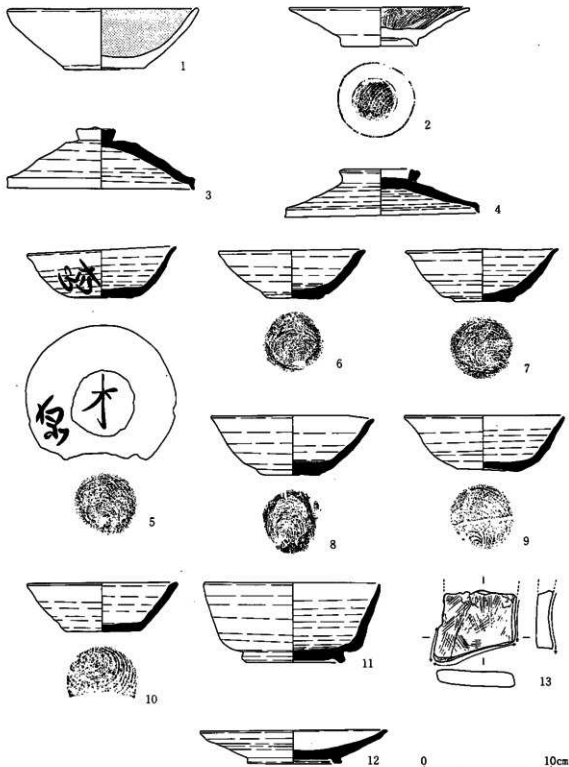
第3图 5号住居址出土土器·石器



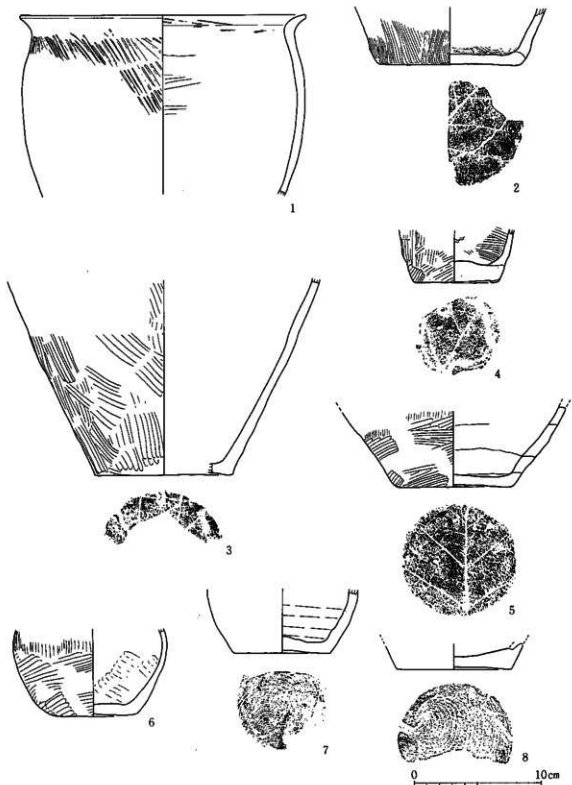
第4图 2号住居址出土土器



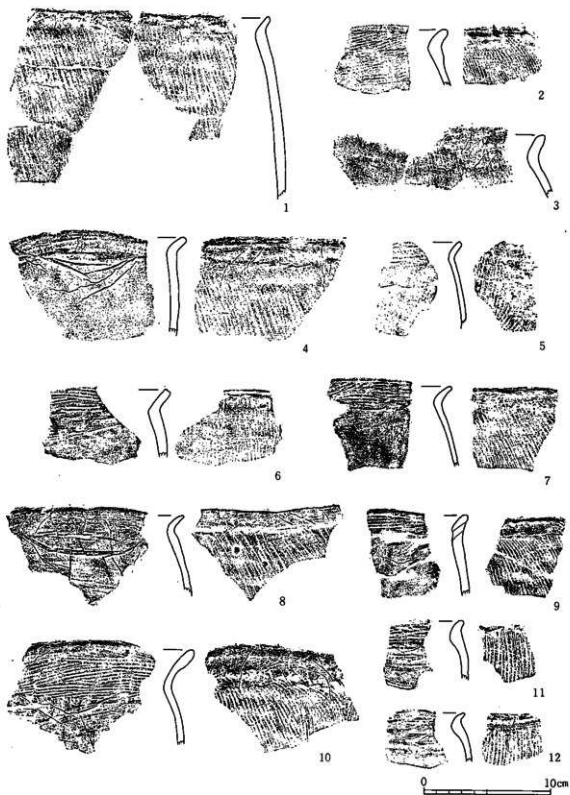
第5图 2号住居址出土土器



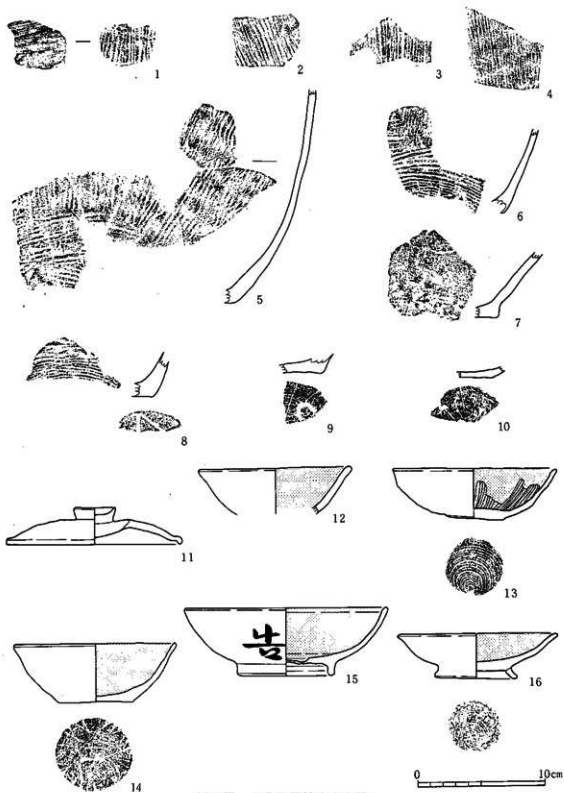
第6图 2号住居址出土土器·石器



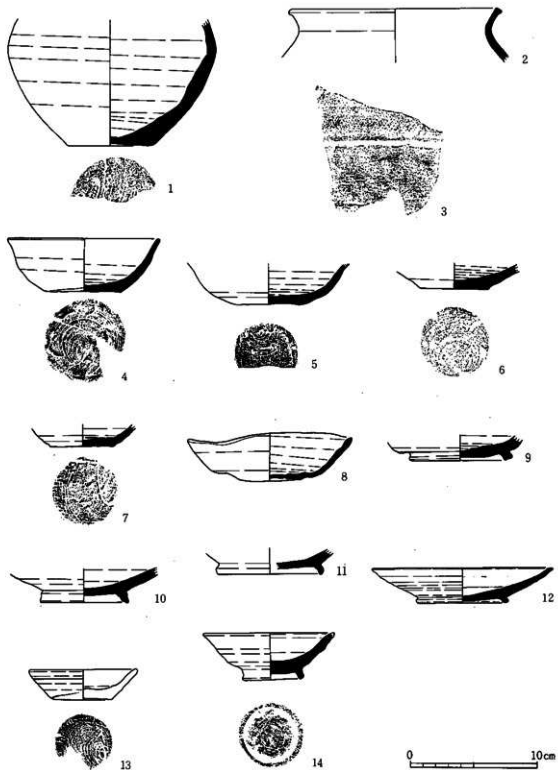
第7图 4号住居址出土土器



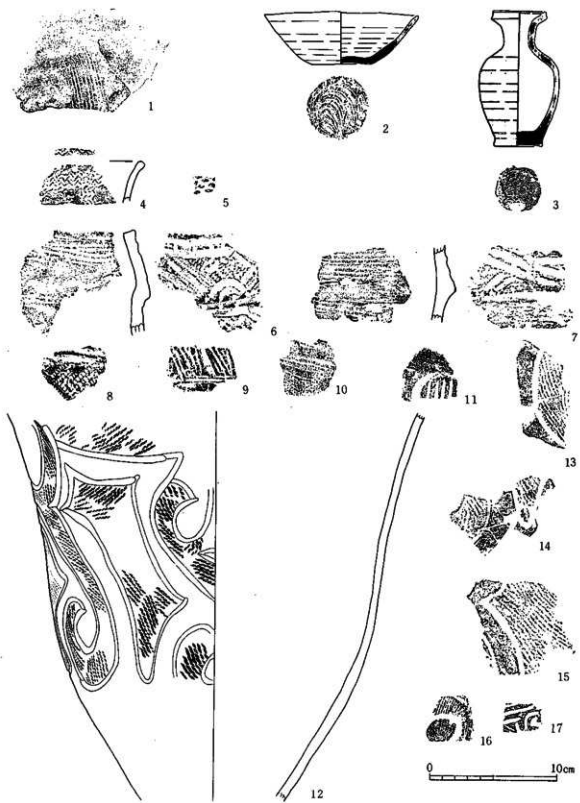
第8图 4号住居址出土土器



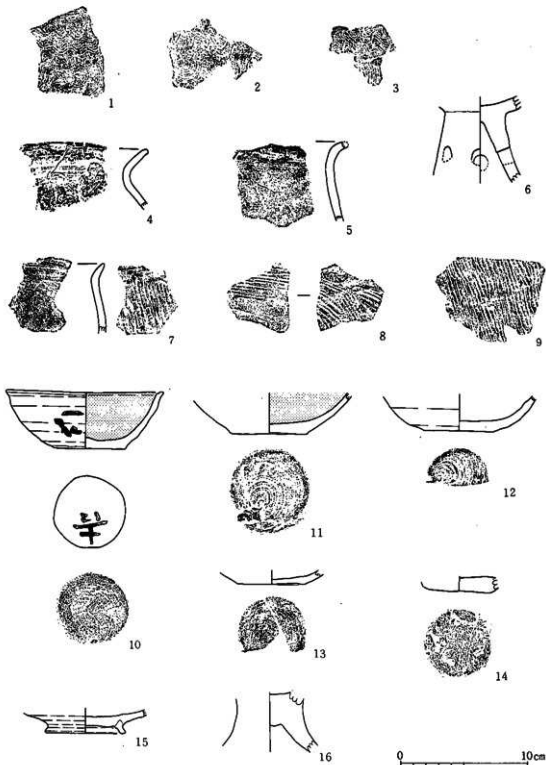
第9图 4号住居址出土土器



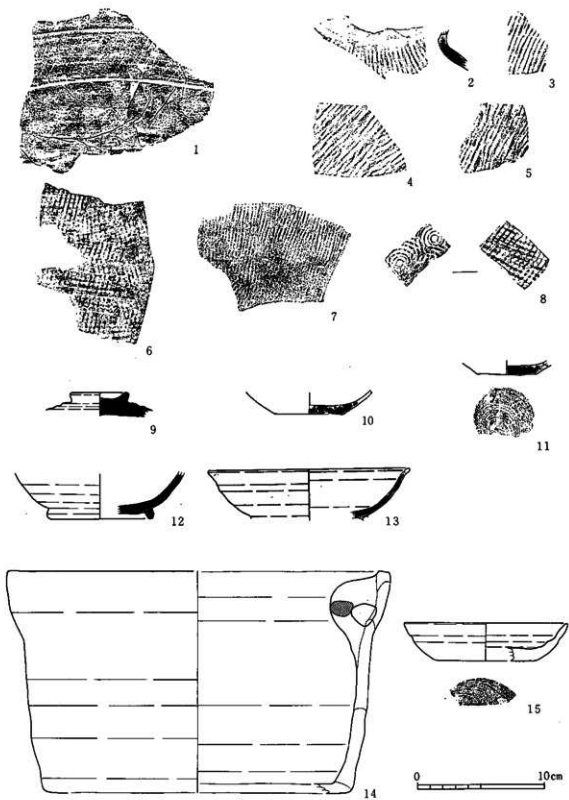
第10图 4·6号住居址出土土器(1~12 4住, 13·14 6住)



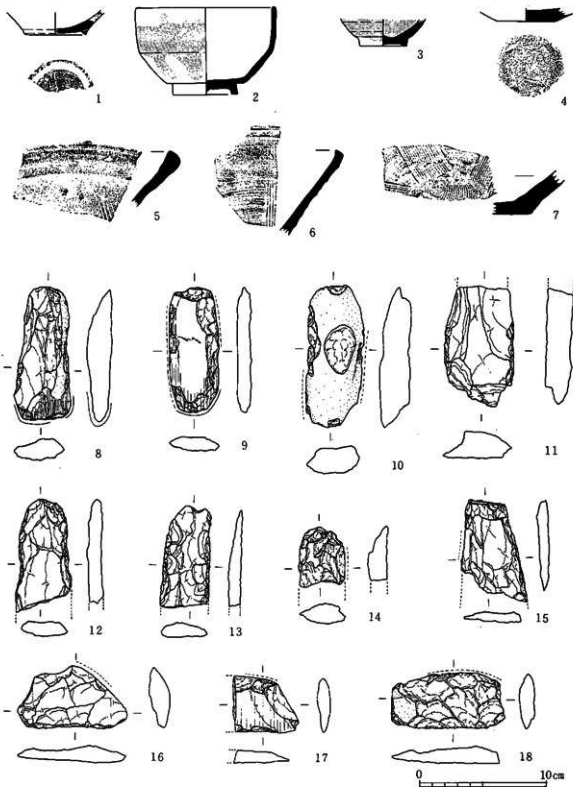
第11圖 土坑13·柱穴·遺構外出土土器 (1、13、2·3柱穴, 4~17遺構外)



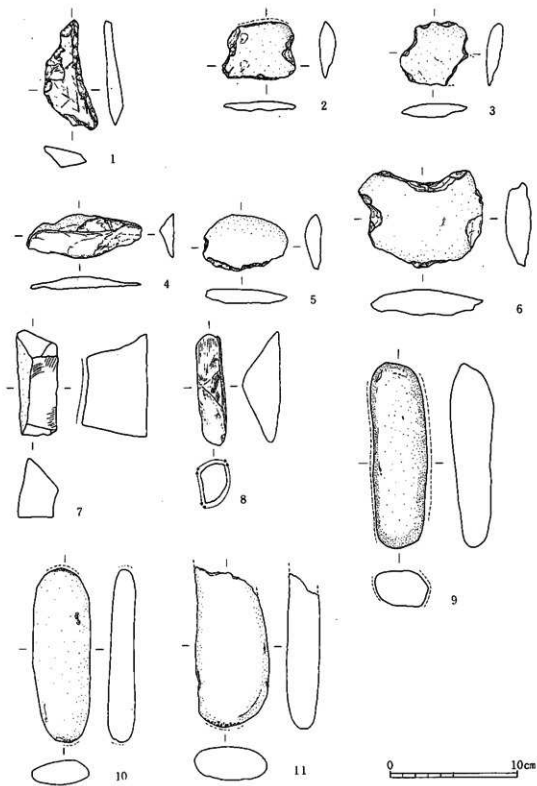
第12回 遺構外出土土器



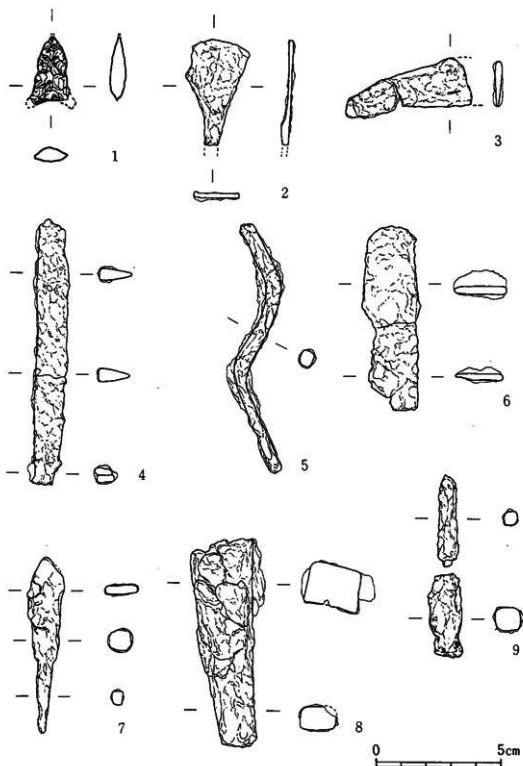
第13圖 遺構外出土土器



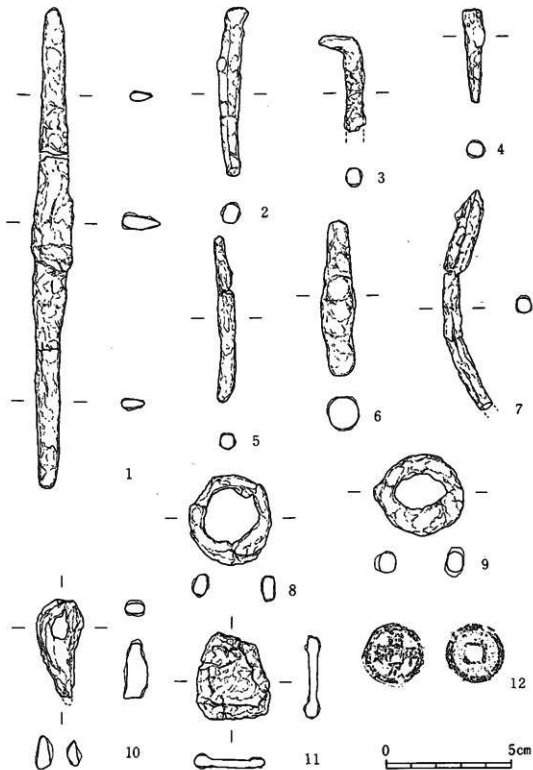
第14図 道標外出土土器・石器



第15圖 遺構外出土石器



第16图 2·4号住居址·土坑13·遺構外出土石器·鉄製品
(2 2住, 3·4 4住, 5·6 土13, 1·7~9遺構外)



第17圖 遺構外出土鉄製品・錢貨

写真図版

図版 1



遺構分布状況



同上



3号住居址



同上炉



同上炉断面

5号住居址



同上炉



同上炉断面





2号住居址



同遺物出土状態



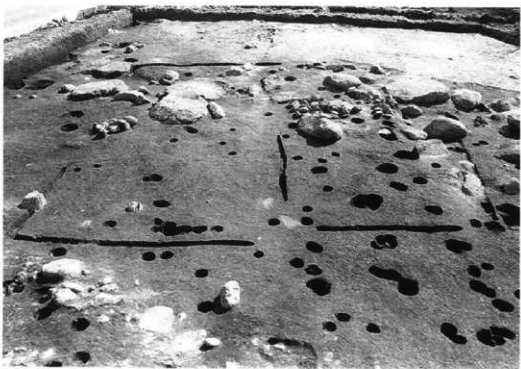
4号住居址



同上カマド



6号住居址



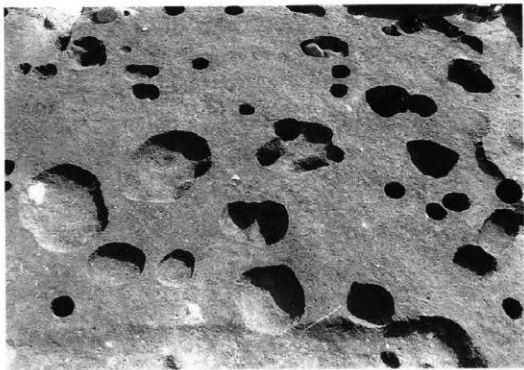
圆沟址 1



集石1・2



集石3



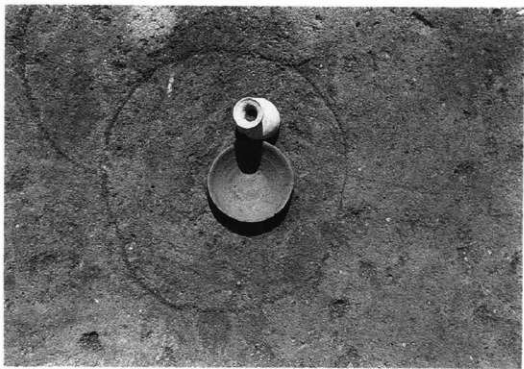
土坑 4·5·9



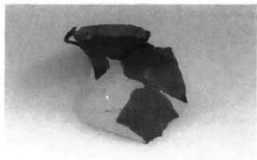
土坑10



柱穴



T5P1 遺物出土狀態



3号住居址出土土器

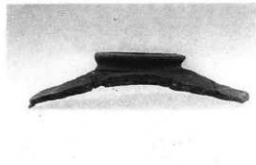


5号住居址出土土器

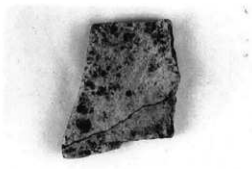
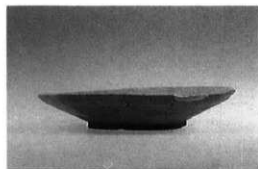
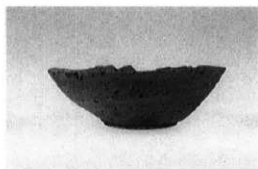
图版11



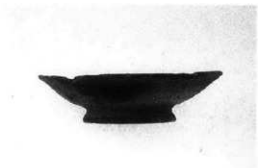
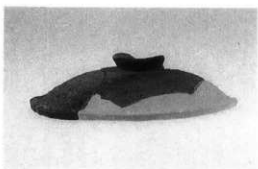
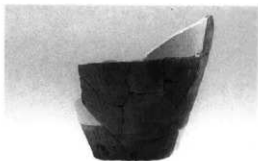
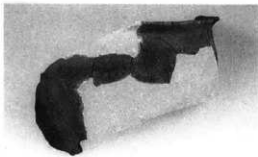
5号住居址出土土器



2号住居址出土土器



2号住居址出土土器·石器



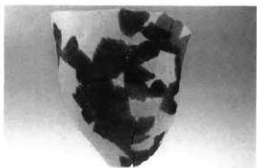
4号住居址出土土器・铁製品



6号住居址出土土器

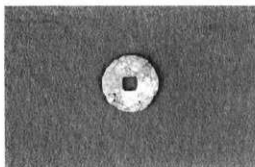
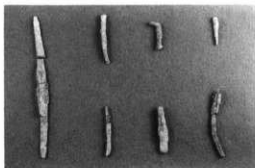
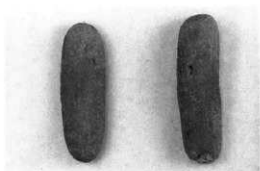


T5P1出土土器



遺構外出土土器

図版15



遺構外出土石器・鉄製品



試掘調査作業風景



同上

図版17



重機作業風景



作業風景



同上

日向田遺跡Ⅱ

飯田信用金庫切石支店新築に伴う
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1990年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534
飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社

